世界樹のはやぶさ

吉良義人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界樹のはやぶさ

【Ｎコード】
Ｎ０３３８ＢＡ

【作者名】
吉良義人

【あらすじ】
世界にそびえ立つ、途方も無く巨大な樹、世界樹。
人々はその世界樹の中に出来ている穴を通って、世界樹の頂を目指して進んでいく。人々はこういった者たちを冒険者と呼んでいた。
そんな中、過去にあった出来事から世界樹を避ける者がいた。
その者はある時を境に、再び世界樹を上り始める。
その者の名前はハヤト。
ハヤトは再び登る世界樹で何を見、そして何を考えるのか――。

第一話　出会い（前書き）

初めまして、この作品の作者の吉良義人です。
今回の作品は、僕にとっての初投稿となります。
まだまだ至らないところがあるとは思いますが、よろしくお願いします。

第一話　出会い

新聞や食器、パンといった物が所狭しと机の上や棚に置かれた部屋の中。それぞれの品の前に値札がある事から考えるに、恐らく雑貨店かそれに類似した店だろう。

その雑貨店の中、一人の少女が不機嫌そうに、机の前に置かれている椅子に腰かけていた。

その少女は普通の服の上から、人体の急所となる、胸や腹部といった所のみを覆う鎧を身につけている。また、その腰には細身の剣が吊るされており、人目で戦う事を生業としているのだと分かる。

顔は美しく整っており、目が大きいこともあって人に活発そうな印象を感じさせる。彼女の後頭部で一つに束ねられた栗色の髪の毛は子馬の尻尾を連想させ、活発そうな印象を強めている。

普段なら明るい笑顔を浮かべているのであろうその顔を、少女は現在、不機嫌そうにしかめ、唇を尖らせていた。

そんな少女に苦笑いを浮かべた男が、部屋の奥から出てくる。

不機嫌そうにしている少女よりもよっぽど戦いに向いていそうな厳つい顔と、刈り上げたのか、光沢を放ってキラキラと輝く坊主頭がよく似合っている。

「テナちゃんよぅ……。一応、今は商売中なんだけど……」

厳つい顔の割りに、情けないような弱々しい声を出したその男を、テナと呼ばれた少女はむぅ、と見上げた。

「……その割りに、お客さんは来ていないのね？」

「あたっ！　痛い事言われたなぁ～……」

少女の言葉に顔をしかめたその男は、真面目な顔になってテナを見る。

「……アリアちゃんとはいつ仲直りするんだい？」

「知らないよ、あんな奴……」

男の言葉に、反抗するような言葉を言いながらも、テナの顔は少

し陰りを見せる。
後頭部で束ねられている髪も、心なしか萎れているように見える。
そんなテナの様子に、やれやれと肩をすくめながら、男は話を変える。
「それで、パーティーを組んでくれる人の目星はついたのかい？」
「……いいや。即戦力になりそうな人は一人も……」
そう言ってから、テナは「はぁぁ……」と、深く息を吐く。
そんなテナを見つめていた男だったが、何か良い事でも思いついたのか、ニヤッ、と人の悪い笑みを浮かべる。そして、あくまでさりげなく話し始めた。
「……そういえば、俺の昔の知り合いに一人、世界樹攻略をやっていた奴がいてな……。今は現役引退をしているんだが……」
男の言葉に、机にべったりと倒していた顔をガバッ、と音が出そうな勢いで上げたテナは、男に尋ねる。
「……その人の事、教えてくれない？」
そんなテナの様子に、心の中でニヤリと悪い笑顔を浮かべながらも、実際はいつも通りの表情を作って、男は言葉を続ける。
「ハヤトって野郎なんだがな、そいつが冒険者をやっていたのは２年前までだ。俺が冒険者として戦っていたときに、俺のチームのリーダーだった野郎だ。俺が知る中じゃあ、そいつは一番強かったな」
「……その人、今何歳？」
「今か？　あの時は１７だったから、今は１９かな？」
テナの質問に答えた後、初めて男はニヤッ、と顔に笑みを浮かべる。そしてテナの方に顔を寄せ、秘め事を話すときのように、小さな声でテナに尋ねる。
「……そいつの住所、教えて欲しいか？」
男の言葉に、テナはこくこくと勢い良く頷く。
素直な娘だなぁ、と思いながら、男はそのハヤトの住所をテナに伝える。
それを聞き終わった瞬間、テナは勢い良く部屋を出て行き、先程

とは違うたったっと元気な音を立てながら走っていった。
少女の走っていく音を聞きながら、男は小さく呟いた。
「……ハヤト……。お前が責任を負うことなんて、無いんだぜ……」
そう呟いた男の顔は、何処か悲しげでもあった。

××××××××

「はぁ、はぁ、はぁ。……ここが……」
恐らく走ってきたのであろう、息を切らしたテナは、一軒の家の前に立っていた。
その家は、割合綺麗に整備されているものの、そこら辺の家との違いのよく分からない物だった。
冒険者という仕事は、他の職業と比べると収入はかなり多いため、その住居は結構大きなものである事が多いのだ。
そのためやはり、その家の周りに立ち並ぶ家の中には、明らかに大きなものも存在する。
これには冒険者の職業がどういう物かという事がかなり関係してくるのだが、この話は後にしよう。
軽く息を整えたテナは、手をゆっくりと上げ、その家の扉を叩いた。
５秒、１０秒と経過し、もう一度扉を叩こうかとテナが思い始めた頃、中から声が聞こえてくる。
「……はい、何でしょう？」
「私、テナ＝レスターといいます。ハヤト＝シラキさんですか？あなたに話があって来ました」
テナの言葉に、ゆっくりと扉が開かれる。
武装しているテナの姿に、目を鋭くさせる青年。明らかにテナの事を警戒している。
しかしテナは、青年のその姿に対して驚きを感じていた。
雑貨店の男から聞いていた情報では、ハヤトという青年は２年前

まではかなりの腕を持つ冒険者だったらしい。それが突然冒険者を止めたのだから、てっきりテナは、ハヤトは腕や目を失っていて、義手なり義眼なりを使っているものと考えていたのだ。
それが実際は、ハヤトは義手や義眼がないどころか、特に特徴の見当たらない、いたって平凡な風貌の青年だったのだ。あえて特徴を挙げるとするならば、その髪が、ここら辺ではあまりいない黒だったことだろうか。
本当にハヤトという青年は冒険者だったのか、心の中に不安が芽生えるテナだったが、すぐにこの考えを取り消す。
人を見た目で判断するのは、愚かな行為だという事を思い出したからだ。
「2年前まであなたが冒険者だった事を聞いて来ました」
テナの言葉に、ハヤトは明らかに目付きを険しくさせる。
何かを言おうとしたハヤトだったが、何を思ったのか、開きかけた口を閉じる。
恐らくはここでテナを追い返して、余計な騒ぎを生み出すことは避けようと考えたのだろう。
「……どうぞ、入ってください」
と、テナを自分の家の中に招き入れた。
家に通されたテナは、その家が意外と綺麗に整えられていたことに驚きながら歩く。
ハヤトに連れられてロビーまで案内されたテナは、話を切り出した。
「私が話したいのことは、一つだけです――」
テナの言葉に、ハヤトは怪訝そうな目を向ける。「何を言い出すんだこいつは？」とでも言いたそうな顔である。
それを無視して、テナは言い放った。
「――私と、パーティーを組んでください！」

第一話　出会い（後書き）

どうも、吉良義人です。
この作品が初投稿なので当然ですが、小説の後書きを書くのも今回が初めてです。
何を書こうかな……？
とりあえず、今回の作品について少し。
今回の字数は２０００文字を少し越えた程度でしたが、次回からは５０００文字以上を目標に書いていこうと思っています。
また、この作品の投稿は一週間ごとの予定です。
ですので、次回の投稿は一週間後の１月８日の午前０時を予定しています。

では、そろそろ締めを。
この作品「世界樹のはやぶさ」をご一読いただき、まことにありがとうございます。
作者はこの作品についての批評や感想、気になった事なども大歓迎の姿勢で臨んでいくつもりですので、気軽に感想欄に書き込んでください。
では、今回は本当にありがとうございました。

第二話　結成（前書き）

まず初めに謝罪を。

「作品の投稿は一週間ごと」とか第一話の後書きで書きましたが、不定期更新になりそうです。

……現に、1月8日になっていないのに、第二話を投稿していますから……。

改めて書かせて頂きますと、作品の投稿は不定期。しかし、少なくとも一週間に一話投稿という形にさせて頂こうと思います。

それでは第二話、よろしくお願いします。

第二話　結成

「私と、パーティーを組んでください！」
そう言って頭を下げたテナに、ハヤトは驚きの混じった顔を向けていた。
冒険者という職業は、その仕事の関係上、その立場はかなり高いものになる。そのため、冒険者が一般の人間に頭を下げるといった事は、珍しいものなのだ。
「……テナ＝レスターさんと言いましたか、頭を上げてください」
ハヤトの言葉に従って頭を上げたテナは、ハヤトのことを真剣な顔で見つめてくる。
思わずテナと目を合わせてしまったハヤトは、テナの瞳の奥に不安と、焦りのようなものが見えた気がした。それを認識すると同時に、ハヤトは強い既視感を感じる。だが当然、ハヤトとテナは初対面の間柄である。
「……どうして、僕となのですか？　……僕なんかより適任の冒険者は、他にもたくさんいるでしょう？」
自分の頭をガンガンと鳴らすその既視感に眉間をしかめながら、ハヤトはゆっくりと言葉を紡いだ。
ハヤトの言葉に少し俯いていたテナは、小さく呟いた。
「……他の人たちには、みんな断られました……」
そう言いながら、テナの表情はどんどん沈んでいく。それを見たハヤトの心の中には、どこか居心地の悪い感情が芽生えていた。いうなれば、罪悪感、といった感情に近いものだ。
テナの言葉から察するに、自分は最後の砦か、もしくはそれに準ずる物なのだろう。となれば、かなり断り辛くなってくる。自分がテナの頼みを無為に拒めば、少女は必ず落胆し、その顔を曇らせるであろうから。
本当につい先程出会ったばかりの少女だが、この少女を悲しませ

る事を、自分の心は防ごうとしていた。先程感じた既視感が、その感情を生み出したのだろうか。
そんな事を考えながら、ハヤトはテナに尋ねる。
テナの言葉だけでは、自分の所に来た完全な理由にはなっていない。
「……僕が冒険者だった事は、誰から聞いたんですか？」
「……エレック雑貨店の、店主、エレック＝オリマーからです」
テナの告げた名前を聞いた瞬間、ハヤトは自分の頭を抱えて、座り込みたくなった。
エレック＝オリマー。かつてはハヤトの仲間のものであったその名前は、ハヤトに懐かしい感覚を味あわさせる。エレックであれば、自分の住所を伝えることなどは造作も無いだろう。
だが、エレックは若干、間の抜けたところのあった青年であったが、それ以上に慎重な性格だった。そんな彼が、容易に人の、しかもかつては仲間だった者の名前を伝えるとは思えない。
なんらかの、エレックの思惑が存在すると考えていいだろう。
テナの頼みを聞くつもりは無かったが、そこにエレックが絡みだすならば話は別だ。
はぁ、と息を吐いて、ハヤトはテナに告げる。
「分かりました。あなたの言う通り、あなたとパーティーを組みましょう、レスターさん」
ハヤトは頼みを断るものだと思っていたのだろう。
ハヤトの答えを聞いたテナの表情はどんどん明るくなっていき、顔に大きな花が咲いた。
「ありがとうございます！」
テナの言葉を聞きながら、ハヤトは一言、付け足そうとする。
「……レスターさん、あなたも知ってい――」
「あ、私の事はテナ、で呼んでください。苗字で呼ばれるのは慣れていないんです。それと、私に敬語を使うのも。すごくむず痒いです」

テナはにこにこと、そう言った。人に苛立ちを与えない、とても気持ちの良い笑顔だと素直に感じる。先程までの沈んでいた表情が？みたいだ。
他人を下の名前で呼ぶのはいつぶりだろうか、という事をぼんやりと考えながら、ハヤトは改めてテナに告げた。
「……テナ。お前も知っているだろうけど、僕は2年前に引退している。だから、あまり期待はしないでくれよ？」
「はいはーい。分かりました」
……本当に分かっているのだろうか？　と、ハヤトの言葉を聞いても少しも表情を変えず、相変わらず笑っているテナに、ハヤトは若干の不安を感じる。
とりあえず話はまとまったため、ハヤトはテナを戸口まで送っていく。
「……今日はもう夜になるから、明日の昼頃にエレックの店で集合にしよう」
「はい、分かりました。じゃあ私は帰りますね」
その言葉と綺麗な笑顔を残して、テナはあっという間に去っていく。
ややそんなテナの勢いに呆然としながら、ハヤトは自室に戻る。その途中、ハヤトは心の中で自問自答をしていた。
結局、何故、自分はテナの頼みを引き受けたのだろうか？　エリックの知り合いだから？　だがそれも動機としては弱い。ただ、あのテナという少女を放っておくのが、何となく躊躇われたのだ。
自分の感情に、これまでに無いほどの戸惑いを感じながら、ハヤトは自室のベッドに倒れこんだ。

×××××××××

世界には、一本の巨大な樹が立っていた。
頂上が地上からでは見えないほど大きなその樹は、人々からは「

世界樹」と呼ばれていた。
その世界樹は不思議な事に、人の持てる力の全てを尽くしても、皮に傷一つ付けることが出来なかった。
また世界樹の中に、地上から入れる空洞を見つけた人間は、その空洞を探検し、そして幾つもの発見をした。
その空洞は、世界樹の上へ上へと続いていること。そして、その空洞の中には、不思議な力を持った数多の動物が生息しているということだ。
その動物を人間は「魔物」と呼び、多くの人々は世界樹の空洞を通っていく事で、世界樹の上へ行こうと試みる者が多数、現れた。
彼らは互いに手を取り合って、世界樹の攻略を現在まで続けている。この攻略者たちは、一般的に「冒険者」と呼ばれるようになった。
人類に理性が生まれ、互いに手を取り合うようになってから長きに渡って攻略され続けていたが、未だに世界樹の頂上を見てきた者は、誰もいない。
いつしか、世界樹の頂上は神の住む神聖な領域である、という話まで生まれるようになったのである。

×××××××××

ハヤトと出会った次の日、テナは昼前にエレック雑貨店へと向かっていた。
ハヤトの言う「昼頃」を、一般人が昼食を食べる頃の時間と認識したテナは、ハヤトを待たせまいと、集合より早く到着するようにしたのだ。
テナがエレック雑貨店の前まで来たとき、中から賑やかに談笑する声が聞こえてきた。
エレックの店は、お世辞にも客入りの良い店とは言えない。要はあまり繁盛していない店のため、談笑の声が聞こえてくるのはかな

り稀であったりする。
誰か来ているのだろうか、と思いながら店の扉を開けたテナは、予想外の光景を目の当たりにする事となった。
エレックとハヤトが、楽しげに談笑していたのだ。
いや、エレックとハヤトは2年前までチームを組んでいたのだから、こういった光景はあっても当然なのだが、ハヤトよりも早く来ているつもりだったテナにとっては、こういう光景は予想外のものなのだ。
「おっ、テナちゃんか。思った通りの時間に来たな」
店に入ってきたテナに気付いたエリックが、挨拶をしてくる。
それに気が付いたハヤトも、テナを視界に納めると、軽い会釈をしてきた。
「あ、こんにちは……」
自分の方がハヤトよりも遅かったのが、少し悔しいような気がするが、約束通りに来てくれた事が少し嬉しいような気もし、若干複雑な気持ちになっていたテナは、はっきりと返事を返す事が出来なかった。
その時、目に入っている光景に若干の違和感を感じたテナだったが、すぐにその原因が判明する。
ハヤトが武装していたのだ。
テナの武装と同じく、普通の服の上から、体の急所のみを覆うタイプの鎧を身につけている。腰には、やや細身と感じられる程度の剣が一振り、吊るされている。
一目で使い込まれていると判断できる鎧を身につけたハヤトの姿は、歴戦の冒険者だと言われれば納得できるだけのそれになっていた。人である以上、身につけている物が変わってくると、その印象も大分変わってくるものである。
そんなどうでもいい思考を外に追い出しつつ、テナはハヤトに話しかける。
「すみません。待たせましたか？」

「いや、僕が好きで早く来ただけだから、気にする事はないよ」
本当に、昨日のときは接客のための柔らかい言葉だと感じていたのが、鎧を着るだけで頼れるリーダーのような感じを漂わせるのだから、身につけている物というのは重要である。
「……それで、今日は第何層に行くんだい？」
「あ、今日はとりあえず第１０層のテスタまで行こうと思います」
テナの言葉に、ハヤトは「それが妥当なラインか」と呟き、そしてテナに対して頷いてみせた。
話は変わるが、世界樹の構造、というものは真に不思議なもので、世界樹の中の空洞が層を作るように、何面も床のような仕切りがあるのだ。
人はこれを活用して、地上から第１層、第２層、第３層……。というように、順番に名称をつけている。
そしてこれまた不可解なことに、この層は上に行けば行くほど、魔物の強さが増していくのだ。実際は１層ごとの違いはあまり無いのだが、１０層ほど離れてくると大分違ったものになる。
また目安程度で言っておくが、第８層辺りが、駆け出しの冒険者が比較的安全に攻略できる限界である。それ以降は命をかけた戦いとなっていく。そして、現在の攻略の最前線が、第９０層である。
そして世界樹には当然、枝がある。その枝の先に人は、攻略の拠点とするための街を築いていった。第１０層にあるテスタの街が、世界樹の中で一番低い街である。
それはともかく、ハヤトとテナは、エレックに別れを告げて、店の外に出る。
「……さて、あまりゆっくりしていても仕方が無いからな。そろそろ世界樹に行くか」
「……え？　教会には行かないんですか？」
テナから返された疑問の声に、ハヤトは少しの間、ポカンと間の抜けた顔をした後、
「……あぁ。そうだったな、悪い。俺は信者じゃないから……」

と、思い出したように言った。
そんなハヤトの様子に不思議そうな顔をするテナだったが、やがて納得したのか、教会の方へと歩き出した。
冒険者という仕事は必然的に命をかける事となるため、大抵の冒険者はウェルン教と呼ばれる宗教の信者となって、教会へと赴き、攻略から無事に帰還できることを祈願していくのだ。
ただ、それも冒険者全員が信者というわけでは無いため、ハヤトは信者でない冒険者の一人だったのだとテナは解釈したのだろう。
教会の方へと歩いていく二人を、特に客も来ないため暇なエレックは見送る。
「……教会、か……」
そう呟いたエレックの声は、街の人々の喧騒の中に飲み込まれ、ハヤトたちに届くことは無かった。

第二話　結成（後書き）

今回は特に書く事もないですが、小説に関しての批評や感想、気になったことなどは大歓迎ですので、どんどん書いて頂けると幸いです。

それでは、この「世界樹のはやぶさ」を今後も引き続き、よろしくお願いします。

第三話　実戦（前書き）

どうも、吉良義人です。
何か無理をして書き進めてみたら、二日連続投稿が出来てしまいました。
こんなペースでの投稿は……身体にきついものがありますね……。
では前書きもこの位にして、本編をどうぞ、よろしくお願いします。

第三話　実戦

世界樹の根元に広がる街は、エーレンと呼ばれている。
エーレンの街は、世界樹を囲むようにして出来ている巨大な街で、その内部構造は大きく分けて５つになる。
一般人や冒険者の住む「居住区」、商人たちが商売をする「商業区」、貴族たちの屋敷が立ち並ぶ「特級区」、冒険者を志す若者や、世界樹の研究をする学者の住む「学園区」。そして、ウェルン教の信者が教会などを立ててきた「神殿区」だ。
世界樹攻略成功の祈願をすべく、教会へとやって来たハヤトたちは、その神殿区にいた。
神殿区の中でも特に大きなエーレン大聖堂と呼ばれる教会の前に来たテナたち。テナはそのまま教会に入ろうとするが、ハヤトは教会の前で立ち止まった。
「……？　どうしたの、ハヤトさん？　早くお祈りしちゃおうよ」
急に立ち止まり、そのまま動こうとしないハヤトに、テナは疑問の声をかける。
「……ごめんテナ。僕は信者じゃないから。ここで待っているよ」
ハヤトの言葉に、テナは再び声をかけようとする。ウェルン教には信者でなければ入ってはいけないなどという規則は存在しないからだ。
しかし、ハヤトの顔を見ているうちに、テナはその気持ちが薄れてくるのが分かった。
「……分かった。じゃあちょっと待っててて」
そう言い残して、テナは教会の中へと駆け込んでいく。
その後姿を見送ったハヤトは、教会の壁に背中を預け、世界樹を見上げる。この教会からは、ちょうど良い感じで世界樹を拝めるのだ。
世界樹は途中で幾つもの枝を生やしながら、その巨大な幹を伸ば

しており、遥か空の高い所にその頂が存在している。頂には濃い緑色が深く茂っており、枝の先には街のようなものがあるのが分かる。
枝の先に出来ている街の中で一番低い位置にある街。それが今日の目的地、第１０層に存在するテスタだ。
それをしばらく見つめていたハヤトは、やがて世界樹の頂を見つめ、小さく呟く。
「……神の住む樹、世界樹か……」
そして何か古い記憶を思い出そうとするように、ハヤトは目を閉じた。

×××××××××

あの後、教会から出てきたテナと合流したハヤトは、世界樹の前まで来ていた。
教会からは全貌を確かめることも出来た世界樹も、その目の前まで来ると頂などは見えない。深い緑色が茂っていることが分かる程度だ。
世界樹の根元にぽっかりと空いた穴からは、かなり不気味な空気が流れ込んでくる。この穴の中を通っていって、冒険者たちは世界樹の頂を目指すのだ。
一般人なら怯えるであろう不気味な空気も、冒険者にとっては慣れ親しんだものでしかない。一部の熟練の冒険者にとっては、その雰囲気がかなりの興奮を促すらしい。とはいえ、やはりこういった空気を目の当たりにすると緊張するものである。
「……さて、そろそろ行くか」
ハヤトの声に、テナはこくんと頷く。
来る前まで見せていた明るい笑顔は消え、その顔には緊張が浮かび、表情は固くなっている。
「あまり固くなるなよ」
ハヤトの言葉に、テナは顔をぺたぺたと触り、揉みほぐそうとす

る。そんなテナの様子が何となくおかしかったハヤトは、小さな笑みを浮かべる。それを見たテナは照れたような笑みを浮かべ、頬をかく。

ここまでの流れで緊張が大分ほぐれたのか、先程までよりも断然余裕のある表情で、ハヤトとテナは世界樹の中へと入っていった。

世界樹に入ったハヤトたちの目にまず入ってきたのが、ぼんやりと発光する数多の石や苔、虫だ。

世界樹の中は当然洞窟のようになっており、光のような物はほとんど入ってこない。だが、こういった発光するもののおかげで、冒険者は比較的明るい中で、攻略をする事ができるのだ。

その中を歩いていくテナの手には、一枚の地図があった。

少し話が変わるが、これは、世界樹の内部を一つ一つ計測し、作成した正確な地図で、冒険者にとっては必需品となる物だ。だがもちろん、これを作成するための計測をするのも、冒険者である。そのため、世界樹攻略の最前線で戦う冒険者は、地図を持っていない身で攻略を進め、その先に新たな拠点を築かなければならない。

そういった作業はかなりの危険を孕んでいるため、最前線で戦う冒険者は熟練の者しかいない。

さて、話を元に戻そう。

しばらく歩いていたハヤトたちだったが、その目の前に、数匹の、犬のような形をした動物が現れた。が、普通の犬にしてはその目は酷く濁っており、口からぼたぼたと涎を垂らしている。

「グルルル……」

「……魔物か……」

そう低く呟いたハヤトは、腰の剣を抜き、その魔物に構える。そんなハヤトに遅れて魔物の存在に気が付いたテナも、急いで地図を懐にしまい、剣を抜いて構える。

既に戦闘態勢を整えたハヤトたちに向かって、一匹の魔物が飛び掛る。

その動きは速かったが、目を見張るほどでもない。

冷静にそれを見切ったハヤトは、魔物が飛び掛ってくるのに合わせて足を振り上げ、魔物の顎を蹴り上げる。「きゃうん」と悲鳴を上げた魔物の声を無視し、魔物の顔面から腹部にかけて剣を斬り下ろし、魔物の息の根を止める。その途中、ハヤトの手に脆い石を砕くような手応えが伝わり、その感覚にハヤトは少し笑みを浮かべる。

ふと、もう一度魔物の方を見ると、もう一匹がテナの方へと飛び掛っていくのが見えた。

が、テナはそれを軽くいなして、斬り伏せた。

この調子なら、テナの方も心配ないだろうと判断したハヤトは、再び、飛び掛ってきた魔物を斬り伏せていく。

×××××××××

「……よし、魔物はこれで全部か。早く行こう、テナ」

そう言ったハヤトは、すたすたと歩き始める。

ところで話は変わるが、魔物、というのは正確には動物ではなく、魔結晶、と呼ばれる石を核として誕生した存在だ。

この魔結晶についてはまだまだ謎の多い部分があり、研究者たちの中では一つの課題となっている。これまでの研究で分かっていることといえば、魔結晶の硬度と魔物の強さは比例するような関係にある事、ただそれだけだ。

というのも、魔結晶が万全の状態で研究者の元に届けられない事が関係している。

魔物とは魔結晶を核として誕生した存在だ。そのため、その存在を消滅させるには、魔結晶を割るなり砕くなりする必要があるのだ。

ここまでの話で分かってきたとは思うが、この魔結晶を研究者に渡すのは、冒険者だ。そして、冒険者の収入の大半は、この魔結晶を渡すときに得る金だったりする。

この魔結晶は魔物の中にあるため、その価値も当然高くなる。

さて、話を元に戻そう。

すたすたと歩いていくハヤトの後姿を見ながら、テナは一つの疑問を抱き始めていた。
エレックの話では、ハヤトは凄腕の冒険者だったらしい。そう呼ばれていた時期から2年間、普通の人間として暮らしていたとしても、今魔物と戦っていたハヤトの腕は、普通すぎた。
確かに、危なげも無く魔物を葬っていくハヤトの腕前は、冒険者としては十分なそれだ。しかし、だとしても平凡すぎる強さではなかったか。
本当に、ハヤトはエレックの言う通り、凄腕の冒険者だったのだろうか？　本当は、自分がエレックに騙されているのではないか。
そんな疑問がテナの頭の中を駆け回り、テナは立ち尽くしていた。そのため、
「……テナ……おい、テナ？」
「……へ、何？」
いつの間にか戻ってきていたハヤトの言葉を聞き逃し、テナは思わずハヤトに聞き返す。
「へ？　ってお前なぁ……」と、何やら呆れていたハヤトは、再びテナに尋ねる。
「だからな、現在地がどこか、教えてくれないか？」
「あ。うん……」
ハヤトの質問に対し、懐から地図を取り出して、現在地を答えようとするテナ。しかし、先程まで頭の中を駆け巡っていた雑念のせいで、自分たちがどう通ってきたのかが思い出せない。
「……テナ？」
「あ、うん。えっとね……」
ハヤトに事の真実を伝えようと、意を決したテナ。
「……わ……」
「……わ？」
「……分かんなくなっちゃった」
そう言った後、可愛らしく、頭を横から小突く仕草をして「てへ

っ」とまで言うテナ。
「……」
「……」
「……じゃ……」
「……？」
その場を包んだ長い沈黙の後、目を伏せながら小さく呟いたハヤトの言葉が聞き取れず、小さく首を傾げるテナ。
その直後、世界樹の中を、ハヤトの雷のような大声が轟き、響き渡る。
「『てへっ』じゃないぞーーー！！」
「わーーっ！　本当にごめんなさいーーっ！！」

×××××××××

日はすっかり沈み、空は夜の色にどっぷりと沈んだ頃。
世界樹第１０層から延びる枝の先に出来ている街、テスタの入り口に、二人分の人影が現れた。背の高い者と、低い者の二人だ。どちらも、その姿から疲れたような雰囲気が滲み出している。
「……もう大分暗いぞ……」
恨みがましい声を上げたのは、背の高いほうの人影、ハヤトだ。その声を聞いて縮こまっている背の低いほうの人影は、当然テナだ。
「……すみません」
テナの、もはや涙声となりつつあるその声を聞いたハヤトは「はぁ……」と、大きなため息を吐く。
「……本当なら、暗くなる前には着くはずだったんだけど……」
そう言ったハヤトは、再び「はぁ……」と大きなため息を吐き、後ろで縮こまっているテナの方を向く。
「……もう夜になったからね。早いとこ、夕食にしようか」
ハヤトの言葉に、テナは大きく頷く。
そのまま二人がテスタの食堂の方向へと歩き出そうとした時、

「……あら？　そこにいるのは、テナ？」
という少女の声が、二人の耳に入ってくる。
「うん？」と言いながらテナの方を見るハヤトに対し、テナはその声の主の方を見つめて動かない。
「……アリア？」
テナに声をかけた少女、アリアは、テナの言葉に大きく頷いた。

第三話　実戦（後書き）

「世界樹のはやぶさ」の弾三話、如何だったでしょうか。
割と頑張ってみているつもりですが、まだまだ至らない所は無数に存在していると思いますので、ご指摘などありましたら、感想として書き込んでいただけると幸いです。
では、今回はこのくらいで切り上げます。
次回の更新の際もご一読して頂けると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0338ba/

世界樹のはやぶさ

2012年1月6日01時47分発行